

そのくはしきことは後考を俟つのみ、

〔洞房語園 異本補遺〕角町万字屋庄左衛門が家に、万壽と云し格子女郎有し、一人の客になづみて外の勤を疎略にし、庄左衛門が教訓用ひず、うち捨置ば、外の女郎共の爲あしければ、勤をやめ引込せて腰奉公の如く召つかひたり、万壽は生質發明にて、器量ある女なれば、是も當分のこらしめなればこそとおもひ、下女共の古布子をかり著て、少しも耻るけしきもなく、下女共の立働らく程のことを、何事もいとほす働き、或は買物あれば、彼布子を著て中の町へも出て、諸事に付随分かいぐしくはたらきけり、此頃長谷川宗月とて、希代の相人ありて、折々吉原へ來りしが、一日庄左衛門が方へ來りて咄し居候ゆへ、庄左衛門宗月を饗應なし、其遊女共の相を見せければ、宗月も當座の言分に、相應なる挨拶してけり、彼万壽はこれを聞主人庄左衛門が勝手へ立し透に、己も其相人とやらんに見て貫はんとて、宗月に物いふ所へ、庄左衛門また座敷へ出ければ、どこやら主人はこはひ物か、万壽は言捨にして、又勝手へ入けるが、宗月ちよつと万壽が相を見て、庄左衛門にいふ様、先程から大勢の相見し内に、今の下女程の相はなし、福相有てあつばれ遊女ならば、此廓の一二を争ふ名取とも成べし、三年を過ぎずして、かならず千人の上を越すべき相ありといへば、庄左衛門聞て、夫は彼女の仕合にこそといひて、扱宗月には酒を進めて歸しけり、半年計り過れども、主人は何の沙汰もなく、下女にして召仕ひければ、扱は當分のおどしにてはなかりしものかとして、万壽も志をあらためて、人頼みて誤り詫言するゆへ、庄左衛門合點して、また勤を致させければ、かたの如く時花はなて、宗月が言しに違はず、其年より三年目に、年季も一年ありしが、ある有徳成る方へ貫はれて行多の人の上に立しといふ、伊達ある女にて、やつこ万壽といはれし。

〔雲萍雜志三〕島原の難波や與左衛門といへる遊女屋に、濱荻はなといふ太夫あり、もとは播州高砂の